

『万葉集』における動詞「さす」の意味用法

—上代における自他両用動詞の一例—

山口 翔 平

1. はじめに

動詞「さす」は多義語で、「刺す・指す・挿す・差す（常用漢字表内）」や「射す・注す（同表外）」などの様々な漢字を用いて表記される。そのことに加え、「光がさす」「針をさす」のように自他どちらにも用いられる自他両用（自他同形）動詞である。「さす」は『万葉集』においてすでに自他両用である。

動詞の自他については、自他での形態上の違いを研究したもの（釘貫 1996）、現代語の自他両用動詞を研究したもの（須賀 1993、森田 1990, 2000）などが多く、古典語の自他両用動詞を取り扱ったものはほとんど見られない。日本語の自他の別については見解がいくつかあるが、釘貫（1996）が示すような形態的な違いによって自他（あるいは、自他に似た別の要素かもしれない）を弁別していたことは確かであり、そのような動詞と自他両用動詞と比較することは一定の意味があるように思われる。

本稿では動詞「さす」が『万葉集』においてどのような意味用法で用いられるかを明らかにすることで、古代における自他両用動詞の用いられ方についての一端を掴もうとするものである。

2. 先行研究

2.1. 「自他両用動詞」としての記述

これまでの研究において、古典語の自他両用動詞について扱ったものはほとんどなく、前節で述べたようなものがある程度である。

その中の森田（1990）では現代語の「さす」について述べられており、以下のような記述がある。

(24)

- (1) …基本的意味は、異なる他の領域に向けて真っ直ぐ向かって行く、ことである。それが自然現象なら、「日が差す」「潮が差す」であり、意志的行為なら「刀を差す」「水を差す」であって、自他同形の動詞として働く。これは意志と非意志、つまり行為と現象、人為と自然の違い、ガ格に立つ名詞で言うならヒト名詞と自然に生ずるモノ名詞との差である。

そして、このような性質を持つ自他両用動詞を、「自他の動作主が有情者・非情物であるグループ」と分類している。

『古典文法総覧』には「自他両用の語」として以下のものが挙げられているが、「さす」は挙がっていない。

- (2) a ^{あざけ}嘲ぶ・^い遊ぶ・^い急ぐ・^い忌む・^い欠く・^い去る・^いしだく (= 荒レル／荒ラス)・^いたなびく・^いためらふ・^{つが}番ふ・^{つよ}積む・^{つよ}強む・^{つよ}嘆く・^{つよ}張る・^{つよ}吹く・^{つよ}増す・^{つよ}参る・^{つよ}乱る・^{つよ}結ぶ・^{つよ}病む・^ゆ揺する・^ゆ揺る・^ゆ喜ぶ・^ゆ笑ふ
b 出づ・^{つら}連ぬ・^つ連る・^は撥ぬ・^は控ふ・^{ふす}燻ぶ・^{ふす}もて離る・^{ふす}寄す (下二段)
c 閉づ (上二段) (『古典文法総覧』44 ページ)

また、自他両用動詞「おおう」の個別的な研究として、山西 (2007) があり、「さす」が自他両用のものとして挙げられている。

筆者の調査の限り、「さす」の自他両用についてや、古典語の「自他両用動詞」についての記述はこの程度しか見つからなかった。

2. 2. 「自然現象での他動詞の自動的使用」としての記述

ここで、『時代別国語大辞典 上代編』(以下『時代別』)を見てみたい。『時代別』では動詞「さす」は3つの見出しに分けられている。「突き刺す」などの意味の「さす [刺・指]」、「光がさす」などの意味の「さす [刺・指]」、「とどす」の「さす [閉]」の3つである。『時代別』の「上代語概説」では「自動詞・他動詞の差を、西洋文法のそれと全く同じに攷えることはできない。おおむね、動詞の表わす動作が主語に及ぶだけか、他のものに及ぶかの差と考えてよからう。」とし、基本的に自他の別を明示しない方針であるが、凡例で「同一品詞であっても意味・機能にかなりのへだたりのあるもの、同一活用であっても自他の別のはっきりする動詞などは別項目とした」とあり、「さす」は「他動詞—自動詞—意味にへだたりのある他動詞」という見出しの立て方をしているようである。

そのうち、自動詞の「さす」(「光がさす」などの意味の2つ目見出しの「さす」)の【考】には以下のような記述がある。

(3) 【考】 前項の他動詞サスが非人称的ないしは再帰的に使われたものである。

『時代別』の(3)の記述は木下(1959)が関係すると思われ¹⁾。木下(1959)では明示的に「さす」が「非人称的」「再帰的」であるとは述べていないが、その改稿である木下(1972)には「日本語の“非人称主格、”という節がある。そこには「自然現象にもともと他動詞とおぼしい動詞を自動的に用いた例」として、「波寄す」「風吹く」「雪積む」「露置く」「霜結ぶ」等を挙げ、「さす」についても以下の記述がある。(ただし、「さす」が「再帰的」であるという記述はない。)

(4) このほかにもまだ「日がさす」「雨かきまぜて」(一条撰政御集)などの例もある。

サスは最も意味の広い動詞の一つで、どれが原義かわからない語であるが、
ふたほがみ悪しけ人なりあたゆまひ我がする時に防人に佐須

(卷二十・四三八二)

などの、派遣する、行かせるの意から、「朝日さす」(卷十二・三〇四二)、「入日さし」(卷一・一五)・「月夜さし」(卷十・一八八九)などの用法が出たのであろう。「八雲立つ」の異伝形であろうが、「八雲さす出雲」(卷三・四三〇)というときのサスは、雲が立ち広がる、という意味として理解されたと思われる。

[中略]

草木の成長についても同じようなことが言える。枝についてサスを用い、
三諸の 神奈備山に 五百枝刺し しじに生ひたる つがの木の

(卷三・三二四)

根や芽についてハルを用いる。

さし楊 根張り梓を (卷十三・三三二四)

春の日に張れる柳を取り持ちて見れば都の大路し思ほゆ

(卷十九・四一四二)

ハルは本来広げることを意味する他動詞である。

木下氏は類例の記述として、「越す」に関する大岩(1941)、「雨降る」に関する春日(1942)、遠藤(1953)を挙げている。また、紙谷(2003)にも類例の指摘がある。

以上見てきたように、古典語の自他両用動詞に関する研究は体系的に行われていない。また、森田（1990）と木下（1959, 1972）では〈現代語—古典語〉という差がありながらも同じ現象を記述しているように見えるが、その関係も明らかではない。紙谷（2003）も木下氏の例に言及せず、それぞれが個々に類似した現象を述べているように見える。

そこで、繰り返しにはなるが、本稿は『万葉集』における「さす」の意味用法を整理することで、「古典語での動詞の自他両用」を繙く糸口を見出そうとするものである。

なお、「さす」には「さしー」という接頭語的な用法もあるが、本稿では接頭語的な用法については扱わなかった。上代の接頭語「さしー」に関する研究は阿部（2019）があるが、ここでは「さす」の意味の多義性から接頭語にも意味を読み込むことができ、「前項が接頭辞であることが明らかな例は確認できない」としている。動詞「さす」の意味を整理することで、今後、接頭語との関連も詳細に検討できるようになるだろう。

3. 他動詞的用法

まず「さす」の他動詞的な用法を、例を挙げながら検討する。用例の採取は木下（2001）『万葉集』を用い、読みと挙例の表記もこれによる²⁾。

他動詞的用法は2種類に大別されると考えられたので、それぞれ、〈突き入れる〉に類するものと〈めざす〉とに分類し分析を行う。

3. 1. 〈突き入れる〉

他動詞的用法では〈突き入れる〉が「さす」の中心的な意味の1つとなっていると考えられる。この3.1節で挙げる他動詞的用法はすべて、〈突き入れる〉という意味が中心にあると解釈できるものである。

3. 1. 1. 挿し木に関するもの

(5) 庭中の足羽の神に小柴さし〈古志波佐之〉我は齋はむ帰り来までに (㊹
4350)

(6) 小山田の池の堤にさす柳〈左須楊奈疑〉なりもならずも汝と二人はも (㊹
3492)

- (7) み雪降る冬の朝はさし柳〈刺楊〉根張り梓を大御手に取らしたまひて遊ばしし (⑬ 3324)

(5) は枝を地面などに突き立てることと解釈でき、〈突き入れる〉の用法であろう。

(6) (7) は挿し木にしたと考えられる。ヤナギは挿し木の極めて容易な樹種であることが知られている³⁾。また〈枝葉が元気よく生長する〉という意味の「さす」もあるが(後述 4.2 節)、樹勢の強さについてや、生育が旺盛な草木について用いられており、ここでのヤナギは挿し木であると考ええる。

3. 1. 2. 髪飾りに関するもの

髪に〈突き入れる〉ものも見られ、下記のようなものがある。

- (8) 秋萩は盛り過ぐるをいたづらにかざしにささず〈頭刺尔不挿〉帰りなむとや (⑧ 1559)
- (9) 月待ちて家には行かむ我がさせる〈和我佐世流〉あから橘影に見えつつ (⑱ 4060)
- (10) 八十伴の緒の島山に赤る橘うずにさし〈宇受尔指〉紐解きはけて千歳はき (⑲ 4266)

このような例は他にも「うづのつげ小櫛を抑へさす〈抑刺〉(⑬ 3295)」、然さしけらし〈之賀左志家良之〉(⑲ 4211)、「照れる橘うずにさし〈宇受尔左之〉(⑲ 4276)」がある。

「かざし」「うず」どちらも「頭髮の飾り」を意味する⁴⁾もので、(8) (10) は「かざし／うずとしてさす」のような意味で用いられているようである。

このような〈ニ〉を『古典文法総覧』は《変化の結果》としており、『万葉集』では下記の歌が挙げられている⁵⁾。

- (11) 隠りのみ恋ふれば苦しなでしこが花に咲き出よ朝な朝な見む (⑩ 1992)

3. 1. 3. 縫い物に関するもの

前節の例と同様に〈ニ〉が《変化の結果》を表していると考えられる「ニさす」の例として、(12) がある。

- (12) 韓国の虎といふ神を生け取りに八つ取り持ち来その皮を畳にさし〈多々弥

尔刺〉八重畳 (⑩ 3885)

この「畳」は広く敷物をいう⁶⁾もので、「虎の皮を敷物として縫いつづる」の意味であろう。〈突き入れる〉の意味から派生して、〈縫いつづる〉のような意味となっているが、縫うためには針が不可欠であり、〈突き入れる〉からの派生と考えることができる。

3. 1. 4. 舟に関するもの

舟の操縦に関して「さす」を用い、〈舟を進める〉のような意味を表すものがある。

(13) 泉の川の早き瀬を棹さし渡り〈竿刺渡〉ちはやぶる宇治の渡りの激つ瀬を (⑬ 3240)

(14) 水脈引きしつ朝なぎに梶引き^{のぼ}り夕潮に棹さし下り〈佐乎佐之久太理〉 (⑳ 4360)

(15) 夏の夜は道たづたづし舟に乗り川の瀬ごとに棹さし上れ〈佐乎左指能保礼〉 (⑱ 4062)

(16) 堀江より水脈引きしつつみ舟さす〈美布祢左須^{しづを}〉賤男の伴は川の瀬申せ (⑱ 4061)

(13) ~ (15) はいずれも「渡る」「下る」「上る」と、移動を意味する動詞と共に用いられており、「棹を(水に)突き入れて(渡る／下る／上る)」と解釈できよう。そこから、〈突き入れる〉の意味の範疇と考えた。

構文的な特徴に目を向けてみると、(13) は「早き瀬ヲ棹さし渡り」と〈ヲ〉が現れる。一方で(14) (15) は「夕潮ニ棹さし下り」「川の瀬ごとニ棹さし上れ」と〈ニ〉が現れている。(13) の「棹さす」は一語化が進み、「棹をさして(舟を進める)」というところから、〈舟を進める〉という意味になっていると考えられる。「棹さす」が「棹ヲさす」というような目的語—動詞の解釈であれば(14) (15) のように「早き瀬ニ」と現れるところだろう。

さらに、そのような「棹さす」から派生して「舟さす」で〈舟を進める〉の意味になったと思われる(16)がある。(15) (16) の2首は左注に「右の件の歌は、御船綱手を以て江を浜り遊宴せし日に作る。伝誦する人は田辺史福麻呂これなり。」とある歌で、同じ状況下で詠まれたものである。ここから、「棹さす」と「舟さす」が派生関係にあることがうかがえる。

3. 1. 5. 施錠に関するもの

戸などに対して「さす」を用い、〈施錠する〉のような意味を表すものがある。

- (17) 群玉のくるにくぎさし〈久留尔久枳作之〉堅めとし妹が心は動くなめかも (㉔
4390)
- (18) 家^かにありし櫃に鎖さし〈櫃尔鎖刺^{をさ}〉蔵^{をさ}めてし恋の奴がつかみかかりて (16
3816)
- (19) 門たてて戸もさしたるを〈戸毛閉而有乎〉いづくゆか妹が入り来て夢に見
えつる (12 3117)
- (20) 門たてて戸はさしたれど〈戸者雖闔〉盗人のほれる穴より入りて見えけむ (12
3118)
- (21) 行かぬ我を来むとか夜も門ささず〈門不閉〉あはれ我妹子待ちつつあるら
む (11 2594)
- (22) 人の見て言咎めせぬ夢に我今夜至らむやどさすなゆめ〈屋戸閉勿勤〉 (12
2912)

(17) (18) は「釘や鍵を突き入れて（戸や蓋を閉じる）」というものである。「堅む」
「蔵む」とあることから、閉じるための「くぎさす」「鎖さす」という動作であろう。
そこから派生し、(19) ～ (22) のような〈閉める〉の例があると考えられる。(19)
～ (22) の例をさらによく観察すると、(19) (20) には「門たてて」の後に「戸さ
す」とある。「門たてて」は「門を閉める⁷⁾」の意味であり、「戸さす」が〈閉める〉
であると、意味が重複している。新編日本古典文学全集『万葉集』（以下『新編』）は、
この「さす」を「施錠すること⁸⁾」としており、この解釈が適切であると思われる。
この解釈で (21) (22) を見ると、(21) は「施錠せず待つ」、(22) は「夢で逢い
に行くから施錠するな」と解釈でき、「戸は閉めているが施錠はしていない」という
内容と読むことができる。決して「門ささず」が「門を開放している」という意味
を表すわけではなからう。〈施錠する〉という意味であることは「くぎさす」「鎖さ
す」の派生であることから見ても妥当であると思われる。

また、前述の「棹さす」の派生関係と似ており、「棹をさして舟を進める」から
「舟さす〈進める〉」に、「鍵をさして戸を施錠する」から「戸さす〈施錠する〉」に
派生している。

3. 1. 6. 設置に関するもの

網や罫に対して用い、〈設置する〉のような意味で解釈できるものとして、以下のようなものがある。

- (23) 葛城の高間の草野^{かやの}はや知りて標^{しめ}ささましを〈標指益乎〉今そ悔しき (⑦ 1337)
- (24) 我がやどに植ゑ生ほしたる秋萩を誰か標^{しめ}さす 〈誰標刺〉我に知らえず (⑩ 2114)
- (25) 下つ瀬に小網^{こで}さし渡す 〈小網刺渡〉山川も依りて仕ふる神の御代かも (① 38)
- (26) 二上のをてもこのものに網^かさして 〈安美佐之弓〉我が待つ鷹を夢に告げつも (⑩ 4013)
- (27) 足柄のをてもこのものにさ^かすわなの 〈佐須和奈乃〉かなるましづみころあれ紐解く (⑭ 3361)
- (28) ほととぎす夜声なつかし網^かささば 〈安美指者〉花は過ぐとも離れずか鳴かむ (⑰ 3917)
- (29) ひさかたの天行く月を網にさ^かし 〈網尔刺〉我が大君は蓋^{きぬがさ}にせり (③ 240)

他に、「ここと標さし (⑥ 1051)」「小網さすに (⑨ 1717)」「刈り標さして (⑪ 2755)」「網ささましを (⑰ 3918)」「小網さし渡し (⑲ 4189)」がある。

(23) (24) のような「標さす」は 3.1.1 節「挿し木に関するもの」と同様に、地面に〈突き入れる〉ことを表すものと思われる。

(25) ~ (29) は魚や鳥の網についてのものである。網の設置のために杭などを〈突き入れる〉ことからこのように言うものと思われる。(25) は川での漁を言っており、「渡す」からも大きな網を設置するための杭などが必要だと予想される。(26) は「待つ鷹」とあり、〈設置する〉の意味は読み取れ、同様に「をてもこのものに (= あちらこちら)」とある (27) の「さすわな」からも〈設置する〉の意味が読み取れるだろう。しかし、(28) は「網ささば……離れずか鳴かむ」とあり、「もし網をさせば……離れず鳴くだろうか」と〈設置する〉の意味では理解できず、ほととぎすを〈捕える〉ところまでを意味している。

(29) の「月を網にさす」は〈二〉が現れており、他の「網さす」の「網ヲ設置する」という構造からみると特異である。このことについて佐竹 (1956) に指摘があり⁹⁾、佐竹氏は「網さす」の基本的意味は〈網を張る〉であり、そこから、〈網を張って

(32)

(34) 香鳥より熊来をさして〈久麻吉乎左之氏〉漕ぐ舟の梶取る間なく都し思ほ
ゆ (⑰ 4027)

(35) 鶏が鳴く東をさして〈安豆麻乎佐之天〉ふさへしに行かむと思へどよしも
さねなし (⑱ 4131)

(36) あしひきの山路をさして〈山道乎指而〉入り日なす隠りにしかばそこ思ふ
に

(37) 常陸さし〈比多知散思〉行かむ雁もが我が恋を記して付けて妹に知らせむ (⑳
4366)

(38) 鶴がねの今朝鳴くなへに雁がねはいづくさしてか〈何處指香〉雲隠るらむ (㉑
2138)

他に同様の例が13例ある。(② 131、② 138、③ 460、③ 466、⑥ 919、⑨ 1780、
⑩ 1959、⑪ 2747、⑭ 3381、⑮ 3626、⑮ 3627、⑲ 4206、⑲ 4220、⑳ 4374)

(34)の「漕ぐ」や(35)(37)の「行く」など、移動を意味する動詞と伴って用
いられることが多い。(36)(38)も「隠る」「雲隠る」が移動の意味を表しており、「さす」
自体の移動の意味は薄かったようである。〈めぎす〉の18例中、あとに現れる移動
に関わる動詞は「行く」5例、「漕ぐ」3例、「隠る」3例、「渡る」2例、「飛ぶ」2例、「別る」
1例である。(34)～(36)のように人に用いるもの10例、(37)(38)のように鳥
に用いるもの8例がある。鳥に用いるものは鶴4例、雁2例、ほととぎす1例と、「鳥」
1例である。渡り鳥に用いられていることから、遠方への移動に対して用いられる
と考えられる。

構文に注目すると、「ヲさす」と「さす」の直前に〈ヲ〉が現れる例が(36)(38)
以外の16例あり、かなり多い。また、一般的に帰着点は〈ニ〉で表されるが、〈ヲ〉
を用いるのが特徴的である。(後述6.2節)

3. 2. 1. 任命に関するもの

〈任命する〉のような意味で用いられる例があり、これは前節〈めぎす〉の例か
ら派生したものと考えられる。

(39) 官こそさしても遣らめ〈指互毛遣米〉さかしらに行きし荒雄ら波に袖振る (⑳
3864)

(40) 布多^{ふた}富^ほ我^が美^が悪^がしけ人なりあたゆまひ我がする時に防人にさす〈佐伎母里尔
佐須〉 (㉑ 4382)

(39) (40) はいずれも防人の任命についての歌である。〈めざす〉の例が遠方への移動へ限って用いられていることから、防人のような遠方への任命の意味も表すものと思われる。

4. 自動詞的用法

自動詞的用法は意味違いから2種類に分けることができ、それぞれ、「光に関するもの」「植物の生長に関するもの」に分けて分析を行う。「^{かがり}篝さす」の「さす」は従来、他動詞として扱われており、「火をつける」などの意味で説明される。だが、ここでは「日さす」などの例との類似性から、便宜上自動詞的用法として分類している。

4.1. 光に関するもの

光に関して用いる「さす」があり、〈部分的に照らす〉という意味であると考えられる。

- (41) 天伝ふ入り日さしぬれ 〈入り刺奴礼〉ますらをと思へる我もしきたへの衣の袖は通りて濡れぬ (② 135)
- (42) 冬過ぎて春来らし朝日さす 〈朝烏指〉春日の山に霞たなびく (⑩ 1844)
- (43) 夕づく日さすや川辺に 〈指哉河邊尔〉作る屋の形を宜しみうべ寄そりけり (⑩ 3820)
- (44) 我がやどの毛桃の下に月夜さし 〈月夜指〉下心良しうたてこのころ (⑩ 1889)

他に同様のものとして、「朝日さす」(⑫ 3042)、「朝日さし」(⑭ 3407、⑰ 4003)がある。

(41) ~ (43) のように、「入り日」「朝日」「夕づく日」と、いずれも日が低い位置にある様子に用いられている。

(44) は月光に用いられている例である。試みに類義の「照る」と比較してみると、

- (45) 雪の上に照れる月夜に梅の花折りて送らむ愛しき児もがも (⑱ 4134)

「照る」には (45) のような例があり、「雪の上に照れる月夜」と全体的な光を指すようである。一方 (44) は「我がやどの毛桃の下に月夜さし」とかなり限定的な

部分を照らしているようである。

このような、限定的な部分を照らす例があること、低い位置の陽光に用いられること、そして他動詞的用法の〈突き入れる〉という意味も合わせて考えると、光に対して用いられる「さす」は〈部分的に照らす〉という意味だと考えられる。光が部分的に射し込む様子を〈突き入れる〉という意味と関連づけて考えることは可能であろう。

また、光に関して次のような例もある。

(46) うちひさす〈打日指〉宮に行く児をまかなしみ留むれば苦しやればすべなし (④ 532)

(47) あかねさす〈赤根指〉日の暮れぬればすべをなみ千度嘆きて恋ひつつそ居る (⑫ 2901)

(48) 長谷の弓月が下に我が隠せる妻あかねさし〈赤根刺〉照れる月夜に人見てむかも (⑪ 2353)

他に、「うちひさす」11例 (③ 460、⑤ 886、⑦ 1280、⑪ 2365、⑪ 2382、⑫ 3058、⑬ 3234、⑬ 3324、⑭ 3457、⑯ 3791、⑳ 4473)、「あかねさす」8例 (① 20、② 169、② 199、⑥ 916、⑬ 3270、⑬ 3297、⑮ 3732、⑯ 3857、⑰ 4166、⑳ 4455)、「あかねさし」1例 (④ 565) がある。

「うちひさす」は語義未詳であるが、「さす」が光に用いられることからいって、「うちひ」は何らかの日光を指すと思われる。(47)(48)は枕詞「あかねさす(さし)」の例である。「あかね」という語は上代において「あかね色」を指していないようであるが(伊原1967)、「日」などにかかることから、日光についていうものと思われる。「朝日さす」のような低い位置の、赤みがかかる日に用いられることから考えると、「あかね」を用いた染色の色と何らかの関係があると思われ、赤い陽光と「あかね」の染色に連想があったものと思われる。

4. 1. 1. 篝さす

「篝さす」という例があり、従来「火をつける」などとして解釈されてきた。

(49) 婦負川の早き瀬ごとに篝さし〈可我里佐之〉八十伴の緒は鶉川立ちけり (⑰ 4023)

他2例 (⑰ 4011、⑰ 4156) がある。

「篝さす」は暗夜に川面の一部を照らすという漁のための行為であり、前節の〈部分的に照らす〉という意味と関連していると考えられる。中古の「さす」の例を確認していると、「さす」を火に対して用いるものは(50)のような「紙燭さす」しか見当たらず¹²⁾、灯火について用いられているようである。このことから「火をつける」ではなく、〈照る・照らす〉のような意味であったと思われる。

(50) あこぎ、御文を紙燭さして見れば、ただかくのみあり。(『落窪物語』巻之一)¹³⁾

前節との関連からこの「自動詞的用法」に分類しているが、「篝さす」の「さす」が自動詞か他動詞かは判断しがたい。「紙燭さす」は他動詞として用いられており、「日さす」のようなものを他動詞的に用いたとも考えられるだろう。

4.2. 植物の生長に関するもの

植物の様子に対して用い、〈枝葉が元気よく生長する〉という意味を表すものがある。

(51) 百枝槻の木こちごちに枝させるごと 〈枝刺有如〉春の葉の繁きがごとく思へりし (② 213)

(52) 三諸の神奈備山に五百枝さし 〈五百枝刺〉しじに生ひたるつがの木のいや継ぎ継ぎに玉かづら (③ 324)

(53) いかといかとある我がやどに百枝さし 〈百枝刺〉生ふる橘玉に貫く五月を近み (⑧ 1507)

(54) さすだけの大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君 (⑥ 955)

他、「植こ葱な苗なりと言ひし柄はさしにけむ (③ 407)」「みづ枝さししじに生ひたるとがの木の (⑥ 907)」「みそ槻が枝にみづ枝さす (⑬ 3223)」「さすだけの」7例 (② 167、② 199、⑥ 1047、⑥ 1050、⑪ 2773、⑮ 3758、⑯ 3791)がある。

植物の生長や枝葉が数多く萌え出る様子について用いられている。このことは、(51)の「百枝」「こちごちに」、(52)の「五百枝」「しじに生ひたる」、(53)の「いかいかと」「百枝」などからも理解されるだろう。現れる植物は、大きく生長する槻(=ケヤキ)や、常緑樹のつが・橘、草本のこ葱ながある。

また、(54)のような「さすだけの」という枕詞もある。(51)～(53)のように植物の生長に「さす」が用いられていることを考えると、これは竹の生長を表すものと思われる。竹の生長が早いことは万人の知るところであり、このような勢いのあ

る生長を〈突き入れる〉様子と重ね合わせて「さす」と表現したものだろう。

5. その他の例

これまでの分類に当てはまらないような例や、解釈できないような例を挙げる。

- (55) 渋谿の二上山に鶯そ子産むといふさし羽にも〈指羽尔毛〉君がみために鶯そ子産むといふ (⑩ 3882)

まず、「さし羽」という例があり、『新編』では「翳－儀式の際に貴人の後ろからさしかける長柄のうちわ¹⁴⁾」とされている。『竹取物語』には「羅蓋さす」というものもあり、関係する動きを表すと思われる。『万葉集』には(56)の「ささぐ」の例がある。「ささぐ」は「サシ＝アグの約¹⁵⁾」とされており、関係する例であると思われるが、本稿では検討できなかった。他の上代文献も調査し、今後検討する必要がある。

- (56) ささげたる〈指擧有〉旗のまねきは冬ごもり春さり来れば野ごとにつけてある火の〈一に云ふ「冬ごもり春野焼く火の」〉風のむたなびかふごとく (② 199)

また、「八雲さす」というものがあるが、「やつめさす」と「やくもたつ」の混淆と思われる。

- (57) やくもさす〈八雲刺〉出雲の児らが黒髪は吉野の川の沖になづさふ (③ 430)

「やくもさす」について『新編』では『古事記』上にはヤクモタツ、同中にはヤツメサスとあり、その折衷した形か¹⁶⁾、『時代別』では「二つの古い枕詞をふまえて人麻呂時代に造り出された新しい枕詞であろう¹⁷⁾」としている。なお、『万葉集』には「やつめさす」は現れないが、「やつめ」は「八つ芽(または弥つ芽)¹⁸⁾」とされており〈枝葉が元気よく生長する〉と解釈できる。

『時代別』はこの「やくもさす」を例に挙げ、「さす」に「雲が立ちのぼる」という意味があるとする。そうであれば「雲さす」というという表現もあることが考えられるが、このような雲に用いる「さす」は上代には上記とのみであり¹⁹⁾、中古にも「雲さす」という表現は見られない²⁰⁾。これまで見てきた「さす」の意味は〈突

き入れる)との類似性を考えることができたが、雲の様子との類似性は見だしにくく、異質に感じられる。

(58) 百積の舟隠り入る八占さし〈八占刺〉母は問ふともその名は告らじ (⑪ 2407)

「八占さし」という語があるが、『新編』には「いろいろな占いをして、の意か。このサスは設置の意のその転用か²¹⁾」とある。『時代別』では「八 = 占、すなわち多くの占いの意か」とし、【考】に「矢を用いてする占いの意とする説もある²²⁾」と記述されているものである。ここでは判断を保留した。

6. 派生関係についての考察

6. 1. 表記からみた自動詞への派生

ここで、これまで見てきた動詞「さす」の用法とその表記に目を移したい。用法と表記の関係を表にしたものが表1である。

これを見ると、他動詞的用法〈突き入れる〉では「刺」13例、「指」4例、と「刺」が優勢であるが、〈めざす〉には「刺」が使われていないということが分かる。全体としては「刺」が優勢で37例、「指」が26例である。

表1 「さす」の用法と表記

用法\表記		刺	指	ほか	仮名	
他動的 突き入れる	挿し木	1			2	
	髪飾り	1	1	挿1	2	
	縫い物	1				
	舟	1			3	
	施錠	1		閉3 闔1	1	
	設置	7	2		3	
	液体	1	1			
めざす			10	射1	9	
自動的	光	日光	14	9		9
		篝				3
	植物	10	3		1	

「刺」字の表す意味は『広韻』には「針刺(去声、眞韻)」「穿也(入声、昔韻)」とあり、「さす」の〈突き入れる〉と共通性がある。

「指」字は『広韻』には「手指也、又示也、斥也」とあり、ここでは「示す」のような意味として説明されているが、「指」字にも〈めざす〉を意味する(59)(60)の用法があり、そこからの表記と考えられる。(59)(60)は「漢籍電子文献資料庫」による。

(59) 移師東指，閩越相誅：……（『漢書』列伝卷五十七下、司馬相如伝第二十七下）

（移師東指し、閩越相誅ち……）

(60) 七月甲午，有彗星晨見東北方，在中台東一丈，長六尺，色正白，東北行，西南指：……（『魏書』、卷一百五之四、天象志一之四第四）

（七月甲午、彗星有り晨東北方に見え、中台の東一丈に在り、長六尺、色正白、東北より行き、西南指す）

このように、「刺」は「さす」の〈突き入れる〉、「指」は〈めざす〉との関連を見出すことができ、「さす」の他動詞的用法に結びついた表記であることがうかがえる。「さす」の〈めざす〉において「指」しか現れないこともその結びつきによるものと思われる。そして「刺」「指」には〈日が照る〉や〈枝葉が生長する〉といった用法は見られないが、『万葉集』ではよく使われている。

このことから、「さす」の自動詞的用法は他動詞的用法の派生によるものではないかと考えられる。他動詞的用法で「刺」「指」の表記が確立され、それを自動詞的用法にも流用したのだろう。自動詞的用法では「刺」「指」のどちらもがある程度使われていることから他動詞的用法の派生と思われ、「自然現象にもともと他動詞とおぼしい動詞を自動的に用いた例（木下 1972）」という記述を支持する結果となった。

6. 2. 構文的特徴からみた派生

他動詞的用法の構文的な特徴として、〈めざす〉の意味では〈ヲ〉が現れやすいという傾向がみられた。整理したものが表2である。

表2 他動詞的用法の構文と意味

〈突き入れる〉で〈ヲ〉が現れるのは、「さす」と〈ヲ〉で示される目的語が離れている場合のみで、「ヲさす」と直接〈ヲ〉が付く例がない。それに対し〈めざす〉では「ヲさす」という直接〈ヲ〉が付く例が多いという特徴がある。

松元（1976）では、格が不明

構文 \ 意味		突き 入れる	めざす	
				任命
ヲあり	～ヲさす		16	
	～ヲ～さす	3		
	～ヲ～ニさす	2		
ヲなし	～さす	11	2	
	～ニ～さす	10		
	～ニさす	3		1
	～ハ／モさす	2		
名詞修飾のもの		1		
倒置のもの		1		
「さしなべ」／対象なし		1		1

瞭な場合に格表示として〈ヲ〉が用いられるのではないかとの仮説を立て、上代（記紀歌謡）での〈ヲ〉の使用を調査している。「不明瞭な場合」として「(1)客語が『人』『代名詞』の場合」「(2)客述間に介在語が入る場合」「(3)客語が修飾語句を伴う場合」という基準を設定し調査した結果、格明示の必要性が高い時（＝格関係が不明瞭な場合）には〈ヲ〉の出現率が高いということが明らかになっている。

つまり、〈めざす〉の意味において〈ヲ〉が表示されやすいということは、「さす」という動詞において〔場所〕が典型的な目的語となりえなかったからではなからうか。また、〈めざす〉の意味の「さす」は、あとに移動を意味する動詞を伴う例が18例中16例ある。このことから「さす」は移動を意味せず、方向性を示す動詞であり、かなり非動作的な意味を表している。

このことから、〈めざす〉の意味は〈突き入れる〉の意味より後に発生した可能性があると考えたい。

以上のような意味の整理から、上代における自他両用動詞「さす」は他動詞的用法では〈突き入れる〉〈めざす〉を意味し、自動詞的用法では〈部分的に照らす〉〈枝葉が元気よく生長する〉という意味で用いられている結果も得られた。これらは現代語の「さす」の基本的意味「異なる他の領域に向けて真っ直ぐ向かって行く（森田1990）」という記述とも重なる部分があり、この意味を『万葉集』での「さす」の中心的な意味としても考えることができよう。

このような整理によって「八雲さす」が例外的であることや、「籥さす」が「日さす」などと関連性を持った意味であることを示せたであろう。

7. まとめと今後の課題

本稿は、自他両用動詞「さす」の『万葉集』における意味用法を整理した。そして「古典語での動詞の自他両用」研究の出発点として次の①のことを示した。

- ① 木下氏の述べるように、「さす」の自動詞的用法は、他動詞的用法から派生した可能性が高い。

また、意味の整理によって得られた結果として、次の②がある。

- ② 〈めざす〉の意味は〈ヲ〉の表示の多さから〈突き入れる〉の意味より後に発生した可能性がある。

今回は『万葉集』の「さす」という語を概観しただけであり、共時的・通時的な観点に欠けるところがある。共時的には上代における他の文献や、同様の動詞についても調査する必要があるだろうし、通時的には、どのように意味が拡張していくのかという点も必要であろう。

現代語における「戸が閉じる」「戸を閉じる」のような自他両用動詞と比べると、動詞「さす」は意味の抽象的部分が自動詞的に派生しており、〈さす—ささる〉のような自他の関係とは異なる。木下氏の挙げる「霜結ぶ」も「結ぶ」の抽象的意味から派生しているように感じられ、今後は同様の動詞とも比較して詳しく見てゆく必要があると考える。

また、今後「さし—」という接頭語との対照も必要であろう。阿部（2019）に指摘があるが、意図的に「接頭語的要素+動詞+む」を連続して用いていると思われる例がある。

(61) さし焼かむ〈刺将焼〉^を小屋の醜屋^{しこや}にかき棄てむ^む破れ薦を敷きて^敷打ち折らむ^む
醜^{しこ}の醜手^{しこて}をさし交へて〈指易面〉寝らむ君故あかねさす^さ昼はしみらにぬばた
まの夜はすがらにこの床のひしと鳴るまで嘆きつるかも (⑬ 3270)

「篝さす」と関連し、「火をつける」のような意味を含むと解されることもあるが、上代また中古における、火に関わる「さす」は「照る・照らす」のようなものしかなかった。今後、接頭語的用法の意味も今回の研究と照らして考えていきたい。

注

- 1) 木下氏は『時代別』の編修委員の一人である。
- 2) ただし、訳文の「さす」の部分は仮名に改めた。
- 3) 現在でも堤防の補強にヤナギの挿し木が用いられており、「柳枝工」と呼ばれる。ヤナギを用いることについて、古くは『百姓伝記』（1680年代）に記述があるようである。（山田 2019）
- 4) 『時代別』184頁「かざし」項「花や木の枝を折りとって頭にさしたものの。」、115頁「うず」項「…頭髮や冠にさして飾りとしたものの。」による。
- 5) 『古典文法総覧』376頁。
- 6) 『時代別』「たたみ」項。
- 7) 『時代別』「たつ [立]（動下二）」項。
- 8) 『新編』③ 356頁、3177番歌頭注。

- 9) 沢瀉 (1958) が佐竹 (1956) に言及している。
- 10) 大坪 (2005) 570-571 頁による。補読・返り点は省略して示した。() 内は大坪氏の補読を用いて訓読文にしたものである。
- 11) 『時代別』「さしなべ」項。
- 12) 『日本語歴史コーパス』(以下 CHJ)「平安時代編」の語彙素「差す」の全例による。
- 13) テキストは新編日本古典文学全集『落窪物語 堤中納言物語』による。
- 14) 『新編』④ 137 頁、頭注。
- 15) 『時代別』「ささぐ」項。
- 16) 『新編』① 240 頁、頭注。
- 17) 『時代別』「やくもさす」項。
- 18) 『日国』「やつめさす」項。
- 19) 「さし曇り〈刺雲〉(⑩ 2513)」も類例として挙げられることがある。
- 20) CHJ で時代を「平安」に絞り、語彙素「雲」で検索した。「雲立つ」というものが多い。
- 21) 『新編』③ 180 頁、頭注。
- 22) 『時代別』「やうら」項。

参考文献

- 阿部裕 (2019) 「接頭辞型複合動詞の上代における様相」『名古屋言語研究』13、名古屋言語研究会
- 伊原昭 (1967) 「あかねさす」『風俗』7 (2)、日本風俗史学会
- 遠藤嘉基 (1953) 『訓点資料と訓点語の研究』改定版、中央図書出版社 (1981 年臨川書店再版本を参照 pp.174-175)
- 大岩正伸 (1941) 「藤原宮之役民作歌の『持越流』」『文学』9 (12)、岩波書店
- 大坪併治 (2005) 『石山寺本 大度智論古点の国語学的研究』上、風間書房
- 小田勝 (2015) 『实例详解 古典文法総覧』和泉書院
- 春日政治 (1942) 『西大寺本 金光明最勝王経古点の国語学的研究』坤・研究篇、岩波書店
- 紙谷栄治 (2003) 「現代日本語の自動詞について」『関西大学文学論集』52 (3)、関西大学文学会
- 木下正俊 (1959) 「『雨が降る』といふ言ひ方」『国文学』25、関西大学国文学会
 —— (1972) 『万葉集語法の研究』塙書房 (『雨が降る』という言い方)

pp.239-251、木下 1959 の改稿)

————校訂 (2001)『万葉集』(CD-ROM 版) 塙書房

釘貫亨 (1996)『古代日本語の形態変化』和泉書院

国立国語研究所 (2021)『日本語歴史コーパス』〈<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>〉(2021 年 12 月 25 日最終確認)

小島憲之ほか (1994-1996)『万葉集』①-④(新編日本古典文学全集 6-9)、小学館

佐竹昭広 (1956)「人麿の反歌一首 一意味論的考察」『万葉』19、万葉学会

上代語辞典編修委員会 (1967)『時代別国語大辞典 上代編』三省堂

須賀一好 (1993)「自他同形の動詞について」『小松英雄博士退官記念 日本語学論集』三省堂

台湾中央研究院歴史語言研究所「漢籍電子文献資料庫」(無償版)〈<http://hanji.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>〉(最終閲覧日 2021 年 11 月 24 日)

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2000-2002)『日本国語大辞典』第 2 版、小学館

松元季久代 (1976)「『を』の格表示機能の起源について 一対象の限定一」『国文』45、お茶の水女子大学国語国文学会

三谷栄一ほか (2000)『落窪物語 堤中納言物語』(新編日本古典文学全集 17)、小学館

森田良行 (1990)「自他同形動詞の諸問題」『国文学研究』102、早稲田大学国文学会

———— (2000)「自他両用動詞から自他同形動詞へ」『早稲田日本語研究』8、早稲田大学国語学会

山田辰美 (2019)「河川の生態学 一伝統的河川工法・柳枝工を再考する一」『ビオトープ』44、日本ビオトープ協会

山西正子 (2007)「動詞『おおう』と格助詞」『目白大学 文学・言語学研究』3、目白大学

余迺永 (1993)『新校互註宋本広韻』中文大学出版社

(やまぐち しょうへい／本学大学院生)